

ルカによる福音書 8章 40～48節

「貴方の信仰が貴方を救った」

2023.10.22 遠藤清賢

マタイ (9.18～26)、マルコ (5.21～43) の福音書にも同様の出来事が記載されています。内容はどれも具体的でわかりやすい出来事ですが、長血という病に苦しむ女性がイエス様の衣にふれ、この病気が癒された聖書の記述を私の想像を加えながらもう一度振り返りたいと思います。

女性は12年の長い間、出血が止まらない病気を患っていたと書かれています。この病気を長血と呼んでいます。婦人科の病気なのだと思います。この女性が結婚しているのかそうでないのかわかりませんが、当時としてはこの病気になっている女性は汚れた者とされていました。律法によると長血の患者は汚れているので、人と接触することができません。汚れた人が触ると、触られた人も汚されてしまうとされていました。ですから、他の人と親しく交わることができないし、未婚であったら、結婚することができません。そして、もし結婚していたとしても、子供ができなければ、離婚させられてしまうのです。当時の女性にとっては、この病気は、まさに死活問題です。この病気の女性は汚れた者として忌み嫌われ、共同体から疎外され、見捨てられ一人ぼっちで12年間も孤独で生きてきたのかもしれない。この女性はこの病気によって人間関係と社会生活が破壊されていたことが想像されます。

この病気を多くの人たちに知られていたのか、自分だけの秘密にしていたのかわかりませんが、治療を行うことによって苦しめられたと書かれていますので、多くの人たちに知られていて軽蔑と差別の中で生きていたことが想像されます。いずれにしても、この女性にとって、この病気がなければ毎日元気に、幸せに過ごすことができたはずなのにと考えていたと思います。ですから、イエス様が多くの病を一瞬にして直してしまうという噂話を聴き、そのイエス様のところに行き行って治してもらおうと願っていたと思います。そのイエス様がいま目の前にいる苦しんでいる私の病気を治して下さいかもしれない強い希望を持ったことが想像されます。でも多くの人たちの前で自分は長血を患っているということは、正直、言い辛いと思ったでしょう。この病気がまた多くの人に知られてしまったら、自分は汚れた者としてこの社会から、さらに差別され、排除されてしまい、生きて行くことが出来なくなると大きな不安を持ったのかもしれない。ですから、誰にも分からないようにそっとイエス様の衣に触れたのかもしれない。そして、イエス様の衣に触れるときには、イエス様にすがりたい、私の苦しさや悲しみを分かって下さい、私を救ってくださいと、心から祈りながら衣に触れたのではないのでしょうか。そして、触れたとたんに、たちまち病は癒されました。イエス様だけがそのことに気づき「私の衣に触れたのは、誰か。」といった時、恐る恐る震えながら「私です。」と答えました。そしてイエス様はどうして触ったのか問いただしはせず何も言わなかったのですが、女性は震えながら汚れた病気を持っている自分の真実をそしてイエス様なら直して下さいと信じてそ

っと衣に触れたことを、触れた瞬間に病気が治ったことを民衆の前で言いました。イエスは「あなたの信仰が、あなたを救った。安心して行きなさい。」とだけ言い残しその場を立ち去り、ヤイロの娘のところに行きました。

イエス様はこの女性の苦しみと悲しみを、そして今までの人生をこの一瞬で知り、受け入れました。そして、この女性の思いに応えて下さっています。女性は思ったのかもしれない。病気のことを言ったら群衆は、お前は汚れた者だったと言われてしまうかもしれない。しかし、女性は勇気を出して自分自身の真実を語りました。そして主は「あなたの信仰が、あなたを救った。安心して行きなさい。」と言い次の働き場所へと行きました。女性の全ての苦しみが一瞬にして癒され、女性の心は穏やかな安らぎを取り戻し、感謝と感動で心が満たされたことでしょう。

私たちは求めなさい、そうすれば与えられるという言葉を知っています。日本人は、大勢の前で自分の本心や思いを知らせることは、苦手な人が多いのではないのでしょうか。自分の本心を隠し、自分の思いとは違っていても大勢の意見に併せてしまうのが私たちです。このような私たちですが、控えめであっても、私たちの声が小さなものであってもその祈りを主は聞いて下さるということを知ることができます。心から祈り、求めれば、それが神様の御意思に沿ったものであれば、神様はその祈りに応えて下さるという希望を持つことができます。この聖書の箇所は自分にしか分からない苦しみや悲しさ、生きることの辛さを、主は聞いて下さっています。主は私の心のありのままを受入、自分自身が主を信頼することで私たちは主の救いの中で生きることができると聖書は教えています。私たちが、どんな時であっても、どんな状態であっても、主は私たちの心からの祈りを聞いて下さっているのだとおもいます。希望を持って、主への信仰を持って祈りの生活を続けたいと思います。

日常の暮らしの中で、私は多くのお支えとお恵みを頂いているのですが、そのことに気付かず、神様の働きに鈍感になってしまっているのです。私は、年を重ね、体の痛みや、不調、物忘れ、気力がない、など衰えてしまったことを嘆いていることが多くなっています。これが現実なのでどうしようもないことなのですが、このような私にさえも神様は支えて下さり、余りあるお恵みを注いでくださっているのです。そして改めて自分の生活での様々なことを思い起こしてみれば、こんなくたびれた罪深い者であってもこのように礼拝に招き入れて下さること、仕事を与えて下さっていること、家族が共にいて同じ時を過ごすことができること、毎日食事を頂くことができること、多くの人たちが私の為に祈って下さっていること、ほとんどすべての時が神様のお支えと、お恵みにあふれていることに気付かされるのです。私の信仰が、私を救っていることに気付かされるのです。「あなたの信仰が、あなたを救うのだ。」というこの聖句は、私たちに対しての神様からの励ましであると私は捉えています。この励ましを気づかなくなってしまうてはいけないと自分自身を叱咤激励する毎日を過ごしています。